

夏期講習だより

第3号

文責 川上 達磨 (南箕輪小学校)

6月11日(木) 第2回 夏期講習事前読み合わせ会報告

第2回読み合わせ 令和8年6月11日(木)

読み合わせ範囲 「西田哲学選集」第一巻 「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部「善の研究」
「第三編 善」(第一章 行為上)(第二章 行為下)

司会者: 大口 琢弥先生(辰野中学校) レポーター: 栗屋 裕子先生(南部小学校)

【栗屋 裕子先生レポートから】

1. はじめに

栗屋先生のレポートは大変わかりやすいものでした。松本先生の「まずテキストに描かれていることをそのまま理解するよう努めること」に心がけ、をご自身の実践と照らし合わせながら「行為とは如何なるものであるか」を考えていました。

行為とは「意識され意志のある運動・動作のこと」と考え、意志とは「動機や欲求、決意などを目的に合うように一つにしようとするもの」と考えました。

意志は内面のもので、動作は外面のものです。最終的には、一つの目的にまとめることが「意志の統一力」だと考えました。意志は決定され行為に移っていきます。行為とは、自分の頭の中にあるイメージをまとめて、体を使って作っていくことではないかと考えました。そして、自分の学級の子どもたちが取り組んだ「風鈴作り」が行為だったのではないかと考察しました。

栗屋先生の学級では、6月上旬の図画工作の時間に、「風鈴作り」を行いました。子どもたちは制作する前から「何を作ろうかな」「〇〇作りたい」と話をしていました。風鈴作りは、芯材にカラー粘土を付けていきます。カラー粘土に絵の具を入れ、自分の納得のいく色や形を作っていきます。これは、内面(作りしたいもの)を、手を使って外面に出していくことではないかと考え、意志の統一活動としての「行為」が実践されていたと捉え、二つの例を挙げました。

一つ目の例は、スイミーの世界を表現したIさんの姿です。岩影の黒を、スイミーやマグロの黒色と違いをつけていました。また虹色のゼリーのようなクラゲを作るために、色を混ぜすぎないようにしていました。そこに、岩影を作り「意志」と色を混ぜすぎない「意志」を感じました。栗屋先生は、イメージした物を作り上げていくことは、行為そのものだと考えました。

二つ目の例は、たくさんの星でごちゃごちゃしている宇宙を作ったKさんの姿です。思い思いに誰も真似することなく違うものを作ることに「意志」を感じました。

最後に、今回のレポートを作成しながら、栗屋先生は「やっぱり教師になってよかった」と改めて思ったそうです。子どもたちと毎日一緒に過ごし、子どもたちの活動を間近に見られることに幸せを感じたそうです。子どもたちとの日々の生活をたのしみ、一緒にいられることに喜びを感じている栗屋先生の内面を知り、栗屋先生の一つ一つの動きに子どもたちをおも「意志」があり、それこそが「行為」なのかもしれないと感じました。

【グループ討議で出た意見】

<A グループ>

意識された行為と無意識の動作とは、どういうふうに違いがあるのだろうか。

初めての出来事は純粋体験と同じで無意識です。でも行為は、最初は意識的な行為も、慣れてきてだんだん無意識になります。もしかしたら、全て意識していると言えるのではないのでしょうか。そうすると、全ての運動が行為といえるかもしれません。

<B グループ>

どういうものが行為なのかということが議論のテーマになりました。レポートで発表された図工の場面だけではなく、他教科でも、「こうしたい」という意識が出る授業をしたいと思いました。

<C グループ>

P166 意識が出てくる初めての段階。

今日の学校での授業 教師「これ答えてね」→子ども「答えるんですか」ではないと思います。

教材に出会い、「こうしたい」という気持ちになります。このことが行為だと思います。意志のない動作ばかりではなく、行為を増やしていきたい。世の中、動作もあるが、行為のある授業をしたいと思います。

<D グループ>

子どもの行動は目的のある行動で、行為です。

宿題、やらされている子は行為ではない？先生に怒られるからやるのは行為ではないのか。

普段関わる子。暴言の裏には「好かれない」「目立ちたい」という思いがあります。それは動作なのか、行為なのか、結論は出ませんでした。

<E グループ>

目的にも、自覚があるものと自覚がないものがあります。

パン作り 食パン→クロワッサンを作る 掘り下げると行為になります。

動作は外面。子どもの内には目的があります。意志は内面にあるので、子どもとの関係の中で知れていくとよいと思います。

【唐澤正吉先生のご助言】

善い生徒、善い教師、善いクラス、善い学校、善い教育・・・何を思っ「善い」と言えるのだろうか。

善い生徒、善い教師、いずれにも当てはまる「善い」があるのかを考えるのが哲学。

ギリシアのソクラテスの時代、「善」を考えることは哲学の大命題でした。

意志・・・ずうっと善の研究からはじまり、最後まで。

自己・・・単なる「私」ではない。

経験・・・西田哲学は純粹経験がもとにある。

どんなことにつながっているのか、学校生活で見ていった時に腑に落ちます。こんな経験、幸せと感ることが、頭で分かっているなくても腑に落ちることです。

栗屋先生のレポートの「やっぱり教師になってよかった」という言葉、自分を見直し、すごい哲学をやっています。哲学は身近にあるもので、日常生活にあるものです。

日本の戦後、世の中が混迷してくると、哲学がクローズアップされます。

意志—思惟・・・不統一の統一

思惟—意志・・・純粹経験をしながら、どんどん活動、働いていく。日常生活は全てが純粹経験。

無とはどういうことでしょうか。西洋では、無＝ゼロ。東洋では、無＝無限の可能性。無一物無尽蔵。

唐澤先生が、ある学校へ赴任されたとき、自分のノウハウを全て出したそうです。でも毎日忙しくて張り合いがなくなっていました。勉強するつもりで赴任したが、自分を出すだけで何も勉強していないと考えました。でも、無一物無尽蔵。満ぱんの茶碗ではない、空っぽの茶碗。いくらでもつめるから、無一物。知らず知らずのうちに入っていきます。池の底にたまっていきます。視点の変換で一転してやりがいのあるものになりました。ピンチはチャンスです。すべてはつながっています。円環的。

生徒指導の場面で、「このやろう」と思って、ある子を見ていたが応えてくれません。しかし、同じ方向を見ていたら、この子はこんな悩みがあるんだと思ったとたん変わりました。その子が生活記録に悩みを書いてきました。唐澤先生は「悩んでいるんだ」と知っただけです。生徒指導では、言葉にはならなくても伝わってくるものがあります。それが統一力です。いい関係になればつながっていきます。自分のあり方が問われました。論理ではないもの、言葉ではないものが伝わります。